

た。資本階級は、たゞ組合の發達によつて増大した吾々の勢力に對抗するばかりでなく、尙餘りある力を増加した。斯くて労働階級の勢力均衡は、資本階級に有利に打開され、彼等は一齊に攻撃に轉じ、労働階級はその陣地を維持せんとして、惡戦苦闘を續けてゐる。

労働と資本の問題は、究極するところは力と力の問題である。現在に於ける資本の攻撃に抵抗するためには、組合運動は更にその力を増大して資本階級の増大した力を基礎として勢力の均衡を恢復し、更に進んで之を労働階級側に有利に打開して、再び攻撃に轉じなければならぬ。故に組合運動は、現在の組織に於いて、全體的にも、産業的にも組織を完成し、組合員の階級の教育と、團體的訓練とに、努力すると同時に、組合運動を大衆化し、労働階級の全勢力を組織して、資本の壓迫に當らねばならぬ。

これがためには、組合運動は、少數急進分子の隘り易い聲から脱却し、現勢の要求に立脚した政策を以て労働大衆に訴へ、組合運動を、少數階級分子の運動から大衆化する。同時に、大衆を教育して、進歩した階級意識の水準に引上げねばならぬ。方向轉換の意義と精神とは茲に存してゐる。

斯の如く、方向轉換の精神は、日本の労働階級の問題に結成せられた階級意識を棄てることではなくて、之を労働大衆の意識に擴大することであり、階級闘争の立場を降ろすことではなくて、階級闘争の組織に労働大衆を動員することである。之が爲には、労働階級の階級分子は、一般大衆の現實の要求に立脚し、一般大衆の要求を代表

しなければならぬ。然しながら、方向轉換が一度に本来の精神を失つたなら、それは味方との握手ではなくて、敵との妥協となり、階級闘争を棄て、協調主義に墮することとなり、改良主義と、日和見主義と、労働階級に對する妥協的行爲とを粉飾する立派な口實となることを忘れてはならぬ。

四 組合運動の現状と指導精神の批判

屬つて日本の組合運動の現状を顧みると、其うちには、明かに相反した二つの指導精神の對立してゐることを見る。

資本主義が絶望的の攻勢に轉じた結果として、今や日本の組合運動は、次の如き特殊な形勢の下に立つてゐる。

第一、資本階級が、一切の勢力を動員して攻勢に轉じた爲に、在來の組合の力を以てしては、容易に労働條件の改善を獲得することが出来なくなつた。言葉を換へて云へば在來の力のまゝでは、闘争によつて、労働條件の改善を計ることは、それだけ困難となつた。そこで相見主義的階級幹部等は妥協主義と改良主義とへ望みを抱きやうになつた。

第二、然るに他方には、資本階級は、労働者の闘争力を麻痺せしめるために、或ひは、連繫網を擴張して政治的自由の形骸を興へ、労働立法の制定を約束し、社會政策の實施を高唱して、労働階級をして、資本家及び政